

書評：本田仁視「眼球運動と空間定位」

北里大学医学部 鷓飼 一彦

もう、十数年も前のことですが、眼科の同じ年代の数人で Capenter の眼球運動の本「Movements of the eye」を輪読しました。そのときに、ちょうど efference copy とか、空間定位の話が私のところに回ってきました。たまたま持っていた心理の教科書程度の本を参考にして、フラッシュ光の残像が眼が動いたときにどのように見え、また、眼を外からむりやり（でも静かに）動かしてやると外の世界が動いてみえるとか、眼筋麻痺の患者では最初のうちは眼が動かなくとも動かそうとただけで世界が動いてみえるとか、さらには、Skavenski の実験なども持ち出して説明した覚えがあります。皆さん、生理学方面はかなり得意なメンバーでしたが、このあたりのことを理解してもらうには、私の説明も悪かったのか、かなり苦労しました。ちょうど、斜視の人では眼筋にあるストレッチセンサー眼筋自己受容器に異常があるという説が話題になったころでした。

そのあと、何年か経って、Steinbach（皆さんおなじみのカナダのヨーク大学）が来日された折りに、日本の視覚関係者と交流したいと本会に要請され、結局、東京都神経研の岩井先生のおかげで神経研で特別講演会を開くことになったのですが、そのときの話が、斜視の手術前後で指によるポインティングがどう変化するか、という空間定位の話でした。たしか、結論は、一度の手術では変化は少ないが複数回の手術を行なうと空間定位能力が変化してしまうということでした。

このような分野を詳細に調べてまとめた書物は、日本語のものはもちろん、英語のものを含めてもなかなか見つからず、残念に思った記憶があります。本書は、このような分野のみを対象とした書物です。まことに貴重な書籍が出版されたものです。部数はあまり出ないのではないかと心配になってしまいますが（これは余計

なお世話ですね）。

第1章、第2章（あわせて64頁）は眼球運動に関する一般的な解説と眼球位置情報が自己受容器によっているのか否か（インフロー説、アウトフロー説）という問題に関する研究の歴史が書かれています。第3章（10頁あまり）は実験上の問題点を扱っています。そして第4章から第8章までが著者による実験を中心にして記述されています。

興味をもたれた方はぜひ一読をお薦めします。心理を学んでいる人のみならず、生理や眼科で眼球運動をやっている人もこの本が必要なことは、この拙文を読んでくださればおわかりですね。

データ

本田仁視著「眼球運動と空間定位」
引用文献 289 B 5 版 297 頁 ハードカバー
風間書房 平成6年2月28日発行
定価16,480 円 (incl)

目次

- 第1章 眼球運動の種類とその一般的性質
- 第2章 眼球位置情報
- 第3章 研究方法上の基本的問題
- 第4章 固視時の空間定位
- 第5章 サッケードと空間定位 I
- 第6章 サッケードと空間定位 II
- 第7章 追跡眼球運動と空間定位
- 第8章 定位行動と視覚情報